

帯に関する研究 (第3報)

——明治～昭和期の教科書における付け帯について——

豊田幸子・志賀たか子

Studies of the Sash (Ⅲ)

The Tsukeobi in Textbooks from the Meiji to the Showa Era

Sachiko TOYODA and Takako SHIGA

諸 言

前報までの付け帯の調査では、越原家所蔵の付け帯21点について、さらに大正6年～昭和62年までの婦人雑誌“主婦の友”での付け帯に関する記事について検討した^{1,2)}。引き続き、本報では、学校教育における付け帯の状況を知るために、明治～昭和期における、第2次世界大戦以前では高等小学校、女学校・高等女学校、師範学校、実業補習学校、戦後では中学校、高等学校において使用された裁縫及び被服の教科書における帯の種類とさらに付け帯の構成について考察したので報告する。

方 法

日本の教育制度が大きく変化した第二次世界大戦終了後を区切りとし、明治初年～昭和20年までの学校教育での教科書については、教育文献総合目録第三集の「明治以降教科書総合目録Ⅰ小学篇、Ⅱ中学校篇³⁾」と「教科用図書目録第1～2集⁴⁾」より裁縫の教科の分をリストアップし、国立教育研究所において77冊、東書文庫において62冊、を閲覧した。それに加えて「家庭科教育史⁵⁾」より7冊の内容を講読した。戦後の昭和21年から63年までは、「教科書図書館蔵書目録⁶⁾」による中学校教科書での技術・家庭の教科236冊、高等学校教科書での家庭の教科における被服の66冊を教科書研究センター附属教科書図書館において閲覧した。以上の資料より、帯の構成について説明が記載された帯の種類を一覧にし、さらに付け帯については構成及び寸法について検討した。

結果及び考察

1. 明治初年～昭和20年までの教科書における帯の種類

この時代の学校での裁縫教育をみると、明治5年に“学制”が頒布されて以来、各地に学校が設立された。小学校に関しても、女児小学は尋常小学教科の外に“手芸”の名称で教科がおかれたり、女学校、女子師範学校においても、“女紅”、“手芸”の名称で裁縫の教科がおかれた。明治23年の教育令によって、尋常小学校は修業年限3ケ年または4ケ年、高等小学校は2ケ年、3ケ年または4ケ年とし、尋常小学校は義務教育とされた。また、尋常小学校では女児のために“裁縫”の教科を加えることができ、高等小学校では必修とされた⁵⁾。さらに明治40年の改

正によって尋常小学校は6ヶ年が義務教育となり、その後国民学校と名称が変更される。この時から高等小学校は2ヶ年または3ヶ年とされている。

以上のような歴史をふまえて、この時代に学校教育での裁縫の教科では帯の製作がどのようにとり上げられているかをみるために、高等小学校で使用された裁縫の教科書のうち、東書文庫等において閲覧の出来た21冊をみると、帯の製作があるものは12冊みられた。その一覧を表1に示す。当時の普段着であった腹合帯が“昼夜帯”，“合はせ帯”の名称で、どの本にもみられた。大正の末に越原春子先生考案による名古屋帯の構成も、昭和2年刊の「高等小学裁縫学習書」にはのせられており、その後も“改良帯”，“軽装帯”の名称で4冊にみられた。他の種類では丸帯，半幅帯，子供帯も1点ずつみられ、付け帯も“組合はせ帯”の名称で1点の製作がみられた。

表1 高等小学校用教科書における帯の種類 (明治初年～昭和20年)

発行年次	書名	著者	発行所	帯の種類					
				付け帯	丸帯	腹合帯	名古屋帯	半幅帯	子供帯
明治45	高等小学裁縫教科書 教師用 下巻	谷田部順子, 小谷野千代了	日里書房			女腹合せ帯			子供帯
大正15	裁縫帳 高等科	岩瀬郡教育委員会	岩瀬郡教育委員会			腹合せ帯			
昭和2	裁縫教授細目並指導案 高等科第1・2学年	岡山市役所学務課	編者刊			腹合帯			
2	高等小学裁縫学習書	結城親学	文祥堂			合帯	名古屋帯		
2	裁縫学習帳 高1・2之巻	旭川市小学校女教員会	編者刊			女腹合帯			
2	小学校裁縫学習帳 高等科	東彼杵郡裁縫科研究団	大村活版所			女腹合帯			
2	高等科裁縫学習帳	大阪市北区共同研究会裁縫部	前川商店出版部			腹合帯			
2	小学校裁縫帳 高等科用 下巻	山口県教育会	白銀白新堂			腹合帯			子供帯
6	高等小学家事裁縫教授細目	東京高等師範学校内初等教育研究会	培風館			腹合帯			
9	高等小学 裁縫学習帳 第1 2学年用	埼玉県教育会	教育出版			腹合帯	改良帯		
11	裁縫学習帳 高等科 第1学年	三重県家事裁縫研究会	文信堂			合はせ帯	軽装帯		
12	高等小学裁縫新教授書 第3学年用	文部省	大日本図書	組合はせ帯	丸帯	あはせ帯	軽装帯	半幅帯	

次に、女学校、師範学校、実業補習学校等での裁縫の教科書のうち、国立教育研究所等で閲覧の出来た125冊のうち帯の製作があるものは97冊みられた。その一覧を表2に示す。帯の種類としては“女帯”として丸帯や腹合帯の仕立て方を示すものが明治期には見られる。丸帯，腹合帯，男帯の3種はいずれの本にも見られた。腹合帯は明治期には“鯨帯”の名称もみられた。子供帯も32冊にみられ，“紐解男帯・女帯”の名称もみられた。名古屋帯も“文化帯”，“軽装帯”，“改良帯”の名称で大正13年から見られた。付け帯は“文化帯”，“軽装帯”，“組合はせ帯”，“紐解用略式帯”等の名称で11点が見られた。

2. 昭和21年～63年までの教科書における帯の種類

戦時色にぬり上げられた古い教育の変革に対して、昭和21年8月には教育刷新委員会が設置され、戦後教育の根本を指示する教育基本法や実際運営の詳細を規定した学校教育法が昭和22年3月に公布された。同年の4月には新学制の成立と前後して、新しい教育課程の基準である学習指導要領一般篇と各科篇が発行された。その家庭篇によって、新しい教科の家庭科は小学校で第5・6学年に毎週3時間を課することとした。新制中学では家庭科は職業科のなかに農業・工業・商業・水産業と共に包含されて必須科となり、各学年毎週4時間、選択科目として1～4時間を課することとなった。また新制高等学校の家庭科は昭和24年に発足し、学習指導要領家庭篇高等学校用の示す通り普通課程と職業課程に分けて課されることとなった。その後小学校から高校までの学習指導要領はほぼ10年ごとに改められ、小・中学校は戦後5回目、高校

表2-1 女学校・高等女学校・師範学校・実業補習学校用教科書における帯の種類 (明治初年～昭和20年)

発行年次	書名	著者	発行所	帯の種類							
				女帯	丸帯	腹合帯	名古屋帯	半幅帯	男帯	子供帯	
明治11	女学生徒裁縫教授書	久保田梁山	正栄堂	女帯						男帯	
12~13	大阪府手芸校教則図解 裁縫読本巻1~4	岡野金門	宝文軒	女帯						男帯	
16	普通裁縫書 上・下・附録	中尾宗七	前川文采堂	女帯						男帯	
25	新式裁縫教授書 上・下	樋口米子	女子裁縫専門学校	女帯	丸帯					男帯	
25	補刻 普通裁縫教授書上・中・下巻	渡辺辰五郎	前川教育書房	女帯						男帯	
27	裁縫教科書 巻上・下	山陽婦人会	吉岡平助	女帯						男帯	
30	裁縫教科書 巻1・2・3	渡辺辰五郎	渡辺辰五郎		女丸帯	女鯨				男帯	
31	普通裁縫教科書 付録共	錦織竹香	同文館		丸帯	鯨帯				男帯	
32	新式裁縫教科書	春永達	阪田一郎		丸帯					男帯	
34	裁縫教科書 下巻 再版	谷田部順子	目黒書房		丸帯					男帯	
35	実用裁縫教科書	川井比佐	鮮進堂	女帯							小供帯
35	裁縫教科書 上・下巻	谷田部順子	目黒書房		丸帯	腹合帯				男帯	小供帯
38	和洋裁縫教本 和服編上・下	堀越千代子	和洋裁縫女学校蔵版	女帯						男帯	
38	裁縫新教科書 巻上・下	前田とみ子・宮川すい子	自省堂		丸帯	腹合帯				男帯	小供帯
39	普通新編裁縫書 巻上・中・下	錦織竹香	大塚宇二郎・千葉徳政		女丸帯	腹合せの帯				男帯	
40	最新裁縫教科書 上・下巻	錦織竹香	宝文館		女丸帯	腹合帯				男帯	男・女児の帯
41	渡辺先生遺稿新裁縫教科書	渡辺滋	東京裁縫女学校出版部		女丸帯	女鯨帯				男帯	
43	裁縫教科書 巻下	四日市市立高等女学校	伊藤善太郎			腹合帯					小供帯
44	実科高等女学校裁縫教科書 巻1~4	渡辺滋	東京裁縫女学校出版部		丸帯	腹合せ帯				男帯	
44	裁縫新教科書 巻上・下	錦織竹香	宝文館		丸帯	腹合帯				男帯	男・女児の帯
44~大1	新編裁縫教科書 上・中・下	今村順子	目黒書店		丸帯	腹合せ帯				男帯	子供帯
45	普通裁縫教科書 巻上・下	渡辺滋	東京裁縫女学校出版部		丸帯	女腹合せ帯				男帯	
45	高等女学校裁縫教科書 巻1~4	渡辺滋	東京裁縫女学校出版部		丸帯	腹合せ帯				男帯	
大正1	高等女学校用裁縫学習書 巻1~8	神田順・吉村千鶴	晩成処		丸帯	腹合せ帯				男帯	
2	簡易裁縫教科書	専売局見付製造所	警醒社			腹合帯				男帯	
2	専売局製造所職工補習教育裁縫教科書	専売局見付製造所	警醒社			腹合帯				男帯	
5	裁縫教科書 下巻	長尾糸	修文館			女腹合帯					
7	裁縫教科書 上・下巻	長尾糸	修文館		女丸帯	女腹合帯				男帯	男・女児の帯
7	裁縫新教科書 上・下巻	共立女子職業学校校友会	大日本図書			腹合せ帯					女児帯
10	実科高等女学校用裁縫教科書 巻1~4	今村順子	目黒書店		丸帯	腹合せ帯				男帯	
11	裁縫教科書 上・下巻	武田太郎吉	富山房		丸帯					男帯	
11	裁縫教科書 上・下巻 訂正再版	武田太郎吉	富山房			腹合せ帯					
12	新撰裁縫教科書 巻上・下	萩森たつの	宝文館		丸帯	腹合せ女帯				男帯	子供帯
12	新制裁縫教科書 巻1~4	吉村千鶴	東京開成館		女丸帯	腹合帯				男帯	女児帯
13	実用裁縫教授書 附子供洋服と襦物の稽古	渡辺かつ子	春江堂			鯨帯					
13	新時代処女裁縫書	日本女教員協会	日本教育社			腹合帯					
13	メートル法に拠る高等裁縫書 第1・4巻	女子美術学校裁縫研究会	倉持出版部		丸帯	腹合帯				男帯	小供帯
13	メートル法に拠る高等裁縫書 第2巻	女子美術学校裁縫研究会	倉持出版部			合せ帯	文化帯	半幅帯			
13	裁縫と襦物の栞	渡辺くに子	日吉堂		丸帯	昼夜帯				男帯	
13	裁縫新教科書 巻1	伊藤英子	集成堂		丸帯	腹合帯	名古屋帯			男帯	小供帯
14	現代裁縫教科書 巻1~4	吉村千鶴	東京開成館		女丸帯	腹合帯				男丸帯	女児帯
14	新訂裁縫教科書 上巻	伊藤うた	著書刊			女腹合帯					
14	裁縫教本 上・中・下巻	神奈川高等女学校	著者刊		丸帯	腹合帯				男帯	子供帯
14	裁縫の栞	誠修学院	郡是製紙	女帯							
14	増訂裁縫新教科書 上・下巻	共立女子職業学校校友会	大日本図書		丸帯	腹合帯				男帯	女児帯
14	中等教育新裁縫教科書 前・中篇	東京女専・東京裁縫女学校	東京裁縫女学校出版部		丸帯		改良帯			男帯	
14	メートル法裁縫教科書 上・下巻	丸山ちよ・小林れい	三友堂		丸帯	腹合帯				男帯	
14~15	裁縫新教本 和服之部	佐賀高等女学校裁縫研究会	関西書院		丸帯	腹合せ帯				男帯	女児帯
15	高女用 メートル法適用新裁縫教科書	中川とう・佐藤松野	大日本図書		丸帯	腹合せ帯				男帯	女児帯

表2-2

発行年次	書名	著者	発行所	帯の種類								
				付け帯	丸帯	腹合帯	鏡帯	名古屋帯	半幅帯	男帯	子供帯	
大正15	中等教育裁縫教科書 巻1~3	成田 順	大成書院			腹合帯		軽装帯				
15	渡辺裁縫新書 上・下巻	渡辺女学校	渡辺女学校出版部		丸帯	腹合せ帯	鏡帯	改良帯			男帯	
15	模範裁縫教科書 巻1~5	大妻コタカ	三省堂		丸帯	腹合せ帯					男帯	子供帯
15	岩国女子技芸学校裁縫教科書中・後編	東京女専・東京裁縫女学校	東京裁縫女学校		丸帯	腹合せ帯		改良帯			男帯	
昭和2	裁縫教科書 巻2	石原アイ・市橋なみ	成美堂・目里書店			腹合せ帯						
2	裁縫新教科書 巻1-4訂正3版	伊藤英子	集成堂		丸帯	腹合帯		名古屋帯			男帯	子供帯
2	メートルと鯨尺対照 裁縫手芸教科書	市橋なみ・赤司ちう子	東京裁縫研究会		丸帯	腹合せ帯					男帯	女兒帯
2	鯨尺メートル尺対照 裁縫家事教授書	東京女子教育会裁縫家事部	東京女子教育会		女丸帯	腹合帯		軽装帯			男帯	
2	富沢式裁縫教本 巻1~5	富沢茂登子	戸部高等裁縫学校		丸帯	腹合帯		経済帯			男帯	
3	最新裁縫教科書 上・中・下巻	釘宮イセ	著者刊		丸帯	腹合せ帯					男帯	女兒帯
3	裁縫教授参考書	兵庫県立第一高等女学校	著者刊		丸帯	打合せ帯						
4	最新裁縫教科書	木下竹次	目里書店		丸帯	腹合帯		名古屋帯			男帯	
4	増訂裁縫新教科書 メートル法適用	酒井美代	平陽女学校代理部		女丸帯	腹合せ帯					男帯	
4	新々裁縫教科書 巻1~4	松村 豊・今村品子	盛林堂		丸帯	腹合帯		軽装帯			男帯	
7	新模範裁縫教科書 巻1~5	大妻コタカ	三省堂		丸帯	腹合せ帯		軽装帯				
7	中等教育裁縫新教科書 巻1~3	奈良女子高等学校内佐保会	至誠堂		丸帯	腹合帯		名古屋帯			男帯	子供帯
7	裁縫教科書 巻上・下	信濃教育会	大日方利雄		丸帯	腹合帯		名古屋帯			男帯	
7~8	裁縫教科書 巻1・2	王木リソ	王木女学校	紐解用略式帯 文化帯	丸帯	昼夜帯		名古屋帯			男丸帯	紐解男帯 紐解女帯
8	新訂裁縫教科書 巻1~4	市原アイ・市橋なみ	成美堂・目里書店			腹合せ帯		軽装帯				
8	新撰裁縫教科書 巻1~5	大妻学校裁縫研究会	三省堂	軽装帯		腹合帯		名古屋帯				紐解男帯
8	最新裁縫教科書 巻1~4	共立女専・共立女子職業学校	大日本書店		丸帯	腹合せ帯		軽装帯			角帯	
8	裁縫要項	丸橋亀太郎	広島呉実科高女		丸帯	女腹合帯		軽装帯			男帯	子供丸帯
8	新編裁縫教科書	群馬県教育会	換乎堂	文化帯	丸帯	腹合帯		軽装帯				
9	京都府立第二高等女学校用裁縫学習帳	京都第二高等女学校	著者刊		丸帯	腹合帯		文化帯			男帯	
10	新定裁縫教科書 1~4	穴戸ミヤ	目里書店		丸帯	腹合せ帯		名古屋帯				
11	新裁縫教科書 巻1~5	磯畑せい・村瀬初代	富山房		全帯	腹合せ帯		名古屋帯			男帯	
11	新撰裁縫教科書 上	伊藤うた	伊藤学園		丸帯	腹合せ帯		軽装帯			男帯	
11	中等裁縫教科書 巻1~3	戸板裁縫学校裁縫研究会	富山房		丸帯	腹合帯		軽装帯			男帯	女兒帯
11	裁縫指導書 巻6	大阪府立高等女学校	著者刊		丸帯							
11	現代裁縫教科書教授資料	吉村千鶴	東京開成館		丸帯	腹合せ帯		軽装帯			男帯	
11	新式中等裁縫 巻1~3	牛込ちえ	東京開成館			腹合せ帯		軽装帯				
11	新定裁縫教科書 1~4	穴戸ミヤ	目里書房		丸帯	腹合せ帯		名古屋帯				
11	裁縫実習教科書 巻1~8	笹野未香	岐阜西部裁縫女学会		女丸帯	腹合帯						
11	中等教育裁縫新教科書 巻1~3	佐保会	至誠堂	付帯	丸帯	腹合帯		名古屋帯			男帯	子供帯
12	新裁縫教科書 和裁篇	佐香 春	佐香和洋裁縫女学校		丸帯	腹合せ帯		名古屋帯				
12	新撰裁縫教科書 巻1~2	高橋イネ	文書堂			腹合帯		軽装帯				子供帯
12	重訂裁縫教科書 和裁篇	寺地ノブ 他2名	広陵社		丸帯	腹合帯		名古屋帯			男帯	子供帯
12	裁ち縫ひのしをり	安田高等女学校	安田高等女学校		丸帯	腹合帯		名古屋帯			男帯	
12	中等教育標準裁縫教科書 上・中・下	山本キク 他3名	中文館		丸帯	合せ帯		名古屋帯			男帯	
12	新定裁縫教科書 1~4	穴戸ミヤ	目里書店		丸帯	腹合せ帯		名古屋帯				
13	裁縫の技折 下巻	恵那高等実科女学校	著者刊	文化帯	女丸帯			名古屋帯			男角帯	
14	新裁縫教科書 巻上・中・下	岩国女子高等技芸学校	著者刊	文化帯		腹合せ帯		改良帯				
14	精詳衣服新教本 和服編 前後編	岡本すみ	東京開成館	胴一重回しの 名古屋帯・ 結び付け帯	丸帯	合せ帯	裏付帯	名古屋帯	単帯	男角帯	子供帯	
18	新々裁縫教科書 3~4	松村 豊・今村品子	中等教科書		丸帯						男帯	
18	現代裁縫教科書 巻2~4	吉村千鶴	中等教科書		丸帯	腹合せ帯		軽装帯			男帯	
18	新式中等裁縫 巻3~4	牛込ちえ	中等学校教科書		丸帯						男帯	
18	中等裁縫教科書 巻1~3	戸板裁縫学校裁縫研究会	中等学校教科書		丸帯	腹合帯		軽装帯			男帯	女兒帯
19	中等被服 1・2	文部省	文部省	組合はせ帯				なごや帯	半幅帯			

は4回目の改定がなされて現在に至り、平成元年度2月10日には、5年後の平成6年から全国の高校で、家庭科の男女共修が始まるという新教育課程の学習指導要領案が発表されている。

このような家庭科教育の流れの中で、戦前の高等小学校とほぼ同年代とみられる新制中学校における家庭科用教科書のうち、教科書図書館で閲覧の出来た236冊のうち帯の製作のあるものは8冊みられた。その一覧を表3に示す。和服の製作についての教材は昭和31年までにみられ、ひとえ長着、改良着物、あわせ長着、羽織、中裁ち・小裁ち長着、じゅばん等の服種と共に帯の種類では、半幅帯の製作がほとんどにみられた。次に名古屋帯が2冊にみられ、付け帯は1点であった。昭和33年からの指導案改訂と実施により、水産業を除く農業、工業、商業、家庭、職業は男女共通に学習するものとされ、明治初年から女子教育を中心に主として裁縫及び家事の2教科に分立して発展した家庭科系の教育は、戦後の過渡期を経て職業・家庭科において男女共に学習する教科であることが明確となったのである。この時期から裁縫の教科も被服製作と名称も変わり、和服製作の教材も少なくなり、帯の製作もなくなったと考える。昭和52年位までの「技術・家庭女子用2, 3年」の教科書には“女物ひとえ長着”の教材はのせられているが、それ以降から現在における男女共用の教科書では和服の教材はなくなっている。

表3 中学校用教科書における帯の種類 (昭和21年～63年)

発行年次	書名	著者	発行所	帯の種類		
				付け帯	名古屋帯	半幅帯
昭和22	家庭 中学校第三学年用	文部省	日本書籍			半幅帯
26	私たちの家庭2	河原春作 他	実業之日本社			半幅帯
29	中学職業・家庭 家庭生活編3年用(豊かな生活)	北陸教科用図書研究協会	中央書籍			半幅帯
29	新版 生活の喜び 家庭生活 第3巻	職業教育協会	開隆堂	改良帯	なごや帯	
29	たしかな生活 第二学年用	東京家政大学家政教育研究室	二葉			半幅帯
31	わたしたちの生活設計 家庭生活中心3	城戸幡太郎 他	日本書籍		名古屋帯	半幅帯
31	中学の職業・家庭 第2学年用	大日本雄弁会講談社	講談社			帯
31	中学の職業・家庭 家庭版 新訂 第2学年用	氏家寿子 他	講談社			帯

高等学校における家庭科用教科書のうち、教科書図書館で閲覧の出来た66冊のうち帯の製作のあるものは23冊みられた。その一覧を表4に示す。高校での被服の領域の和服製作では、昭和35年発行のものまでは、男・女物あわせ長着を主体に、あわせ羽織、コート類、長じゅばん、はだ着、たんぜん等の服種がみられた。その後から現在では男・女ひとえ長着が主体で、ウールアンサンブル、茶羽織の服種がある。帯の種類では、戦後から昭和29年頃までは戦前には最も多かった腹合帯が“合せ帯”の名称でみられる。半幅帯は全期間に5点みられた。名古屋帯は16冊にみられ最も多かった。付け帯の製作は14点みられ、製作はないが、付け帯についての説明が記載されているものは8冊にみられた。

3. 明治初年～昭和期の教科書における付け帯の構成

戦前の高等小学校においては21冊の教科書を閲覧した結果、「高等小学裁縫新教授書、第3学年用」文部省編、昭和12年刊に付け帯が1点みられたのを図1の資料1に示す。“組合合せ帯”の名称の付け帯で、胴回りと手の部分が一続きになった前帯と平面のままのお太鼓の部分とに分かれた形式である。着装には前帯の表側につけられた紐でお太鼓の上部をしわずけてから結びつけ、垂れ先を下側の30.5cmのベルトにさし込み、前帯の裏側につけた紐で胴体に結びつけるという非常に機能的でオリジナルな形式である。

表4 高等学校用教科書における帯の種類

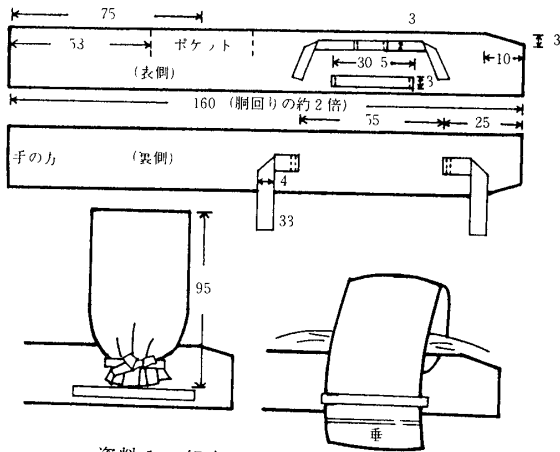
(昭和21~63年)

発行年次	書名	著者	発行所	帯の種類			
				付け帯	名古屋帯	腹合せ帯	半幅帯
昭和25	被服Ⅰ	堀越すみ	中教出版	名古屋帯用的一例	名古屋帯		半幅帯
25	被服	教育文化研究会	教育図書	組み合わせ帯	名古屋帯		
26	裁縫2	成田順 他2名	実教出版			あわせ帯	
29	一般家庭 衣服 改訂版	日本女子大学家庭科研究会	実教出版			合せ帯	
30	明るい家庭 被服Ⅰ	奈良女子大学家政学研究会	学芸出版	軽装帯 文化帯	名古屋帯		
30	明るい家庭 被服Ⅱ	奈良女子大学家政学研究会	学芸出版	付け帯			
31	被服Ⅱ	成田順 他5名	教育図書	組み合わせ帯	名古屋帯		半幅帯
35	高校被服Ⅱ	日本女子大学家庭科研究会	実教出版	結びつけ帯 組合せ帯	名古屋帯		
48	被服Ⅰ	成田順 他2名	中教出版	軽装帯(説明のみ)	名古屋帯 袋名古屋帯		
49	新編 被服Ⅰ	奈良女子大学家政学会	実教出版		名古屋帯		
50	被服Ⅰ	宮坂和雄 他9名	学研書籍	改良帯(説明のみ)	名古屋帯		
50	被服Ⅰ	成田順 他10名	教育図書	軽装帯			
52	改訂版 被服Ⅰ	渡辺ミチ 他11名	教育図書	軽装帯(説明のみ)	名古屋帯		
52	被服Ⅰ	山本キク 他8名	一橋出版		名古屋帯		
52	改訂 被服Ⅰ	宮坂和雄	学習研究社	改良帯(説明のみ)	名古屋帯		
54	新訂版 被服Ⅰ	渡辺ミチ 他11名	教育図書	軽装帯(説明のみ)	名古屋帯		
54	新訂 被服Ⅰ	宮坂和雄	学習研究社	改良帯(説明のみ)	名古屋帯 袋名古屋帯		
57	被服	矢部章彦、小川玄朗 他14名	中教出版	軽装帯			半幅帯
57	新版被服	渡辺ミチ、仙波千代 他10名	教育図書	軽装帯(説明のみ)	名古屋帯		
58	被服	藤枝恵子 他11名	学習研究社	軽装帯			
61	改訂版 被服	渡辺ミチ、仙波千代 他10名	教育図書	軽装帯(説明のみ)	名古屋帯		
61	改訂 被服	藤枝恵子 他11名	学習研究社	軽装帯			
63	被服 改定新版	矢部章彦、小川玄朗 他15名	中教出版	軽装帯			半幅帯

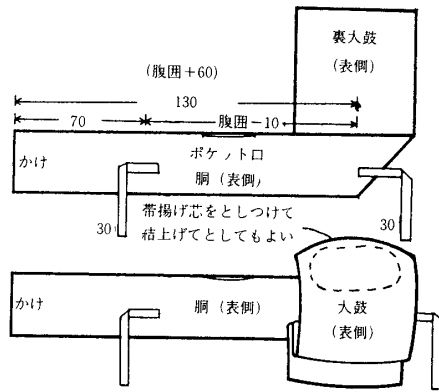
女学校・師範学校等における教科書では、帯の製作のあった97冊のうち、付け帯は11点がみられた、11点の付け帯は構成、機能の面から3種類に分けられる。

第1類は名古屋帯の形式で、図1の資料2の「精詳衣服新教本」岡本すみ著、昭14年刊による“胴一重回しの名古屋帯・結び付け帯”の1点がこの形式である。胴回り寸法はかけ70cmを含む130cmで出来ており、胴回りに30cmのつけ紐をつけてある。お太鼓はそのままでもよいし、帯揚芯をとじつけ、結上げてとじててもよいと説明があった。

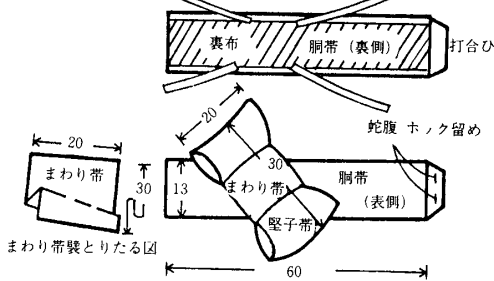
第2類は胴とお太鼓などに作りつけた後帯がつながった形式の付け帯で、図1の資料3~資料7までの5点がこの形式である。資料3は「裁縫教科書巻2」玉木リツ著、昭8年刊による“紐解用略式帯(堅子結び)”で、堅子結びにした後帯を胴に作りつけ、胴の前帯はつけ紐とかぎホックで留めつける形式の子供用付け帯である。資料4は「新編裁縫教科書」群馬県教育会編、昭8年刊による“文化帯”で、胴回り分を120cmの長さの布で作る、片端には帯じめを半分にしたものをぬいつける。お太鼓は裏布と共に70cmの布で作る、上端には帯揚を入れてタックをよせて形作り、厚紙にとじる。垂れ先もお太鼓の長さを決めてとじ、さらに30cmの布で手を作ってとりつけ、裏側では全部の縫代をおおうようにして裏布をとじつける。さらに残りの帯じめを反対側にも取付ける。帯じめや帯揚もすでに取付けてあり、一卷すれば着装が完了する簡便さである。資料5は「裁縫教科書巻2」玉木リツ著、昭8年刊による“文化帯”で、表裏布共に75cmの丈でお太鼓を作り、115cmの布で胴回りと手の分を作り、それにお太鼓を形作って裏側に厚紙を裏布でくるんでとじつける形式である。資料6は「裁縫の枝折」恵那高等



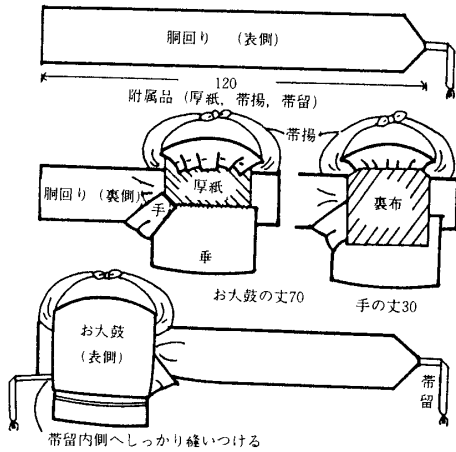
資料1 組合はせ帯



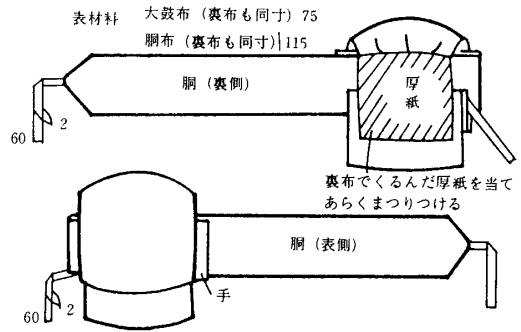
資料2 胴一重回しの名古屋帯・結び付け帯



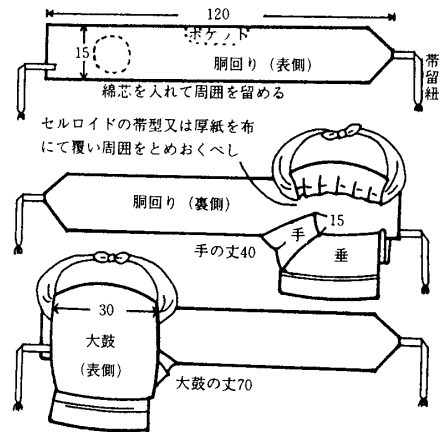
資料3 紐解用略式帯 (堅子結び)



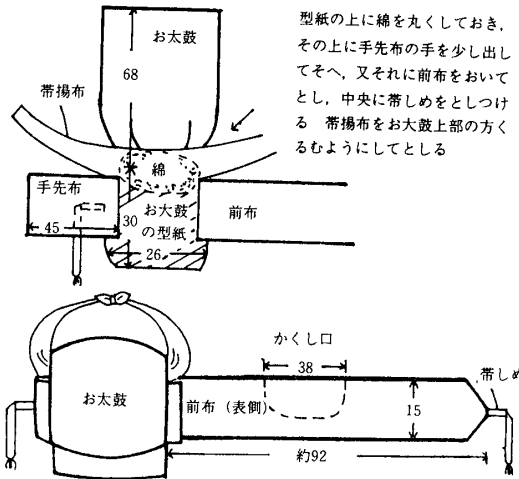
資料4 文化帯



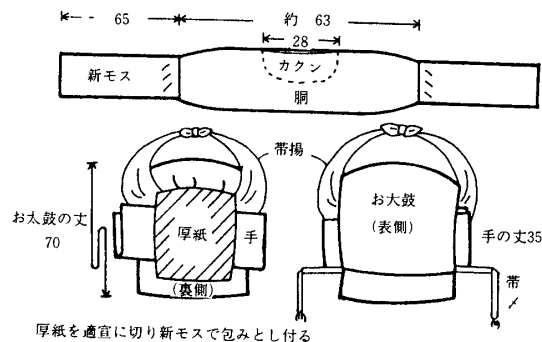
資料5 文化帯



資料6 文化帯B



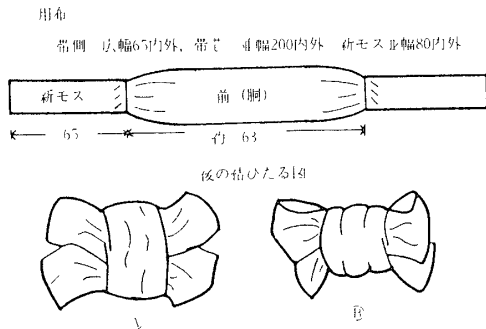
資料7 文化帯



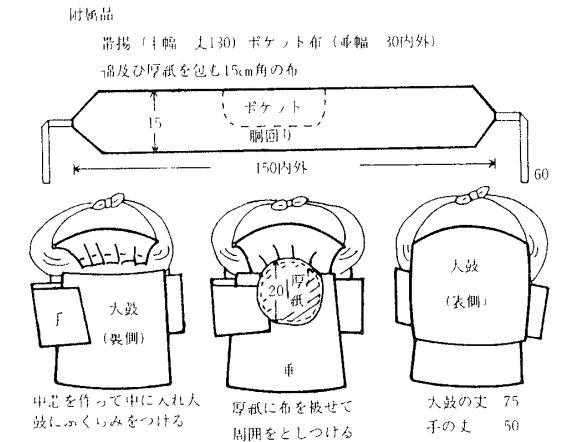
資料8 軽装帯 (大人物)

図1 資料1~8の構成寸法

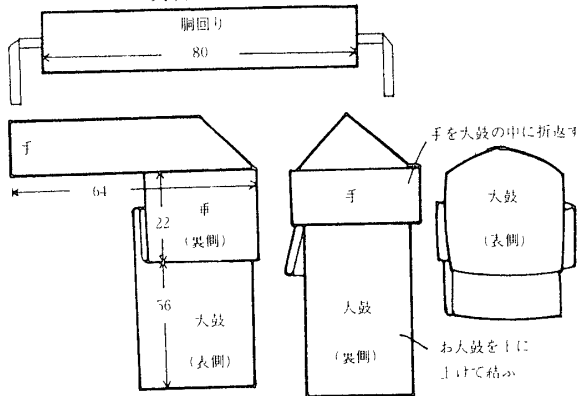
単位 (cm)



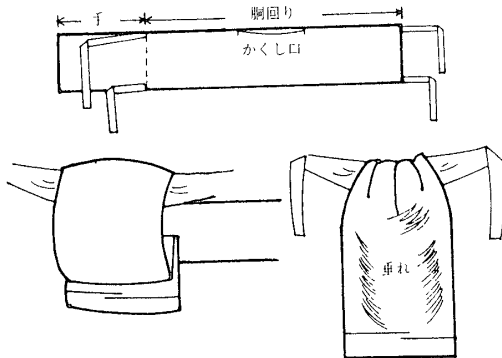
資料9 軽装帯 (子供物)



資料10 付帯



資料11 文化帯 A



資料12 組合はせ帯

図2 資料9～12の構成寸法 単位 (cm)

実科女学校裁縫研究部編, 昭13年刊による“文化帯B”で, この本には付け帯の製作が2点あったので, A, Bとこちらで符号をつけた. 太鼓, 手, 胴回りの寸法は図1に示す. 胴回りの左端に綿芯をつめて土台を作り, そこに太鼓を形作ってから帯揚を入れてとじ付け, 太鼓布の下を折り曲げて垂れを作り, 手も右側から出すようにとり付けて形を作る. 次に裏側にセルロイドの帯型又は厚紙を布でおおい, 周囲を留めるように説明があった. 資料7は「新裁縫教科書中巻」岩国女子高等技芸学校編, 昭14年刊による“文化帯”で図1に示す寸法での手, 前布, お太鼓を縫い上げて, 板目紙を幅26cm, 丈30cmに切った型紙に綿を丸くしておき, その上に手先布を少し出してそえ, 又それに前布をおいてとじ, 中央に帯じめを半分に切ったものをとじつける. 次に帯揚布も, お太鼓の上部の方をくるむようにしてとじる形式で, 資料4, 6と同様に, 帯揚, 帯じめも取付けた簡便な付け帯である.

第3類は胴の部分とお太鼓などに作りつけた後帯とに分かれた形式である. 図1の資料8～図2の資料12までの5点がこの形式である. 資料8は「新撰裁縫教科書巻3」大妻学校裁縫研究部編, 昭8年刊による“軽装帯 (大人物)”で, 胴の方にはカクシ (ポケット) をつけ, 両端には7～8cmの幅で新モスの紐を取付ける. 後帯のお太鼓は手の部分を付けて形作り, 帯揚, 帯じめも2本糸で要所をとめつけて, お太鼓の裏側に厚紙を新モスで包みとじ付ける. 資料9は資料8と同じ教科書にのせられた“軽装帯 (子供物)”で, 胴の方は寸法, 形も同じであるが, 後帯は図のように子供用に文庫結びを広げて変形させたA, Bの2種になっていた. 資料10は「中等教育裁縫新教科書巻1」佐保会編, 昭11年刊による“付帯”であるが, “浪速帯”ともいうと説明があった. 胴回り, お太鼓, 手の寸法は図2に示

す。胴の方は約150cm内外の寸法であるから、二巻き分あると考える。両端は三角に折り、幅2cm、丈60cmの紐をとじ付ける形式であった。お太鼓は布に綿を入れた中芯を作って入れてふくらみを出し、帯揚もつけて上部をとじつける。手をとじつけて、厚紙を楕円形に切り、布をかぶせて周囲をとじつける。さらに“セルロイド製帯型を使ってもよい”、“帯揚止を付けた方がよい”との注意があった。資料11は「裁縫の技折」恵那実科高等女学校裁縫研究部編、昭13年刊による“文化帯A”で、前出の資料6と同じ本にのったものである。胴回りは80cmと、一卷き分の長さである。太鼓の方は、名古屋帯の形式で、手の方として64cmが続いており、図の順序で太鼓の形を作り上げると垂れが二重になると考えられる、オリジナルな形式である。資料12は「中等被服1」文部省編、昭19年刊による“組合せ帯”で、寸法の記入がなく、胴回りと垂れの構成は図のように詳しく記されていた。胴回りと手が続いており、上下2段に紐を付けている。太鼓の方は上端が裁ち目のままと記されているので、図のようにタックをよせて帯揚に作り付けて仕上げると考える。

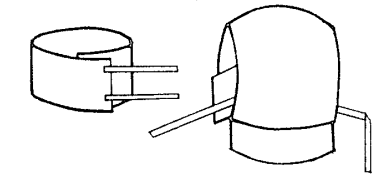
戦後の中学校における家庭科の教科書では、帯の製作のあった8冊のうち、付け帯は1点がみられた。「新版生活の喜び家庭生活第3巻」職業教育協会編、昭29年刊による“改良帯”で、図3の資料13に示す。図の寸法と胴及び太鼓の図のみで説明も詳しく記されていなかった。胴と作りつけたお太鼓に別れた形式である。

高等学校における家庭の教科書では、帯の製作のあった23冊のうち付け帯は14点みられたが、改訂版などでは、付け帯は同じものが2点あったので、付け帯の種類としては12点とした。12点の付け帯は構成、機能の面から2種類に分けられる。

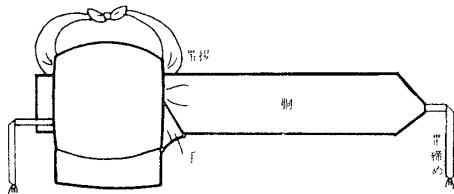
第1類は胴とお太鼓などに作りつけた後帯がつながった形式の付け帯で、図3の資料14～15の2点がこの形式である。資料14は「明るい家庭・被服Ⅰ」奈良女子大学家政学研究会編、昭30年刊による“軽装帯”で、“文化帯”ともいうと説明されている。これには帯の構成寸法はなく、胴とお太鼓を一続きに作りつけた付け帯の図が詳しく書いてあるので取り上げた。資料15は「高校被服Ⅱ」日本女子大学家庭科研究会編、昭35年刊による“結びつけ帯”で、構成寸法は図3に示す。胴回りと手は続いており、台紙に帯上げしんを取付け、その上にお太鼓の上部はタックをよせてとじつける。さらに手の部分をさし込み、垂れ先を折り上げて形を整えて、台紙にとじつける。胴回りの左右には紐がとじつけてある。

第2類は胴の部分とお太鼓などに作りつけた後帯とに分かれた形式である。図3の資料16～図4の資料25の10点がこの形式である。資料16は「被服Ⅰ」堀越すみ編、昭25年刊による“名古屋帯応用の一例”で、構成寸法は書かれていないが、上下2段に紐をつけた胴と手の部分があり、お太鼓は帯揚芯に上部を形よくとじつけた形式である。資料17は「被服」教育文化研究会編、昭25年刊による“組み合わせ帯”で、帯の構成寸法はなく、両端に紐をつけた胴の部分と、お太鼓と手先を形作り、厚紙をくるんだ裏布をとじつけた詳しい図がのせられている。資料18は「明るい家庭・被服Ⅱ」奈良女子大学家政学研究会編、昭32年刊による“付け帯（胴回りとおたいこ別のもの）”で、構成寸法は図3に示す。150cmの胴回りの片すみに、2本の紐を取付け反対側の角に丸い穴の図があるので、ここに紐をくぐらせると考えるが、どのような方法で穴をあけるかと疑問である。お太鼓に手を取付けておき、後帯として着装するが、これは胴回り、手、お太鼓と3つの部分で表裏の色を変えて仕立てておくと、長着の色に応じて帯の色を変えることができ、二様に使われて便利である。資料19は「被服Ⅱ」成田順也5名編、昭31年刊による“組み合わせ帯”で、一卷き分の85cmの長さの前帯であり、両端に50cmの紐がついている。後帯は65cmの垂れに45cmの手をとりつけて、お太鼓の形に作り付けて厚紙にとじつ

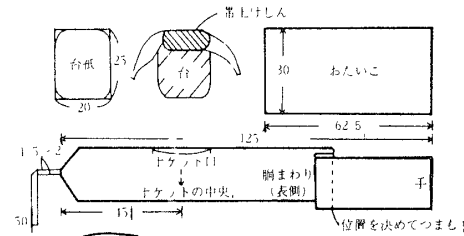
胸 おたいこ 30 手 $\frac{1}{2}$ 幅 まは少し長く
たけ 100-160 手 220



資料13 改良帯

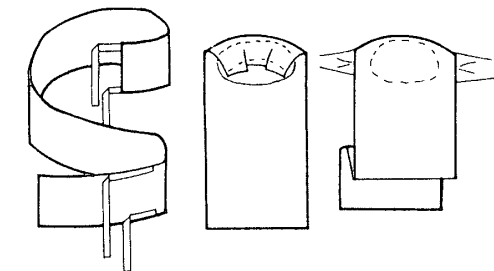


資料14 軽装帯

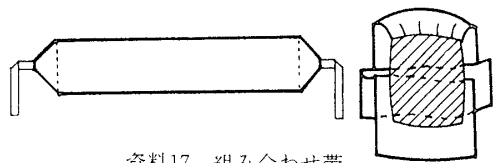


資料15 結びつけ帯

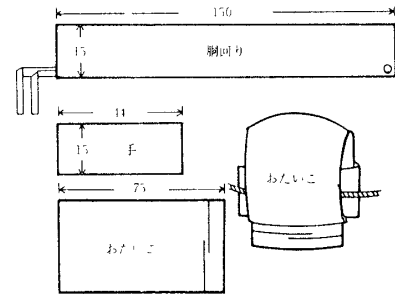
使い古した帯や長着から、きれいな品をとり胸とおんぎを組み合わせたものである



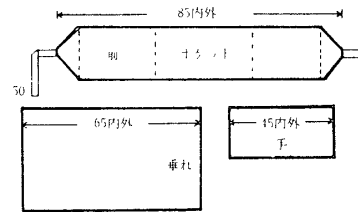
資料16 名古屋帯応用の一例



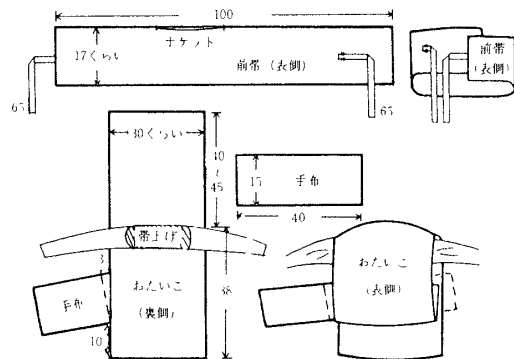
資料17 組み合わせ帯



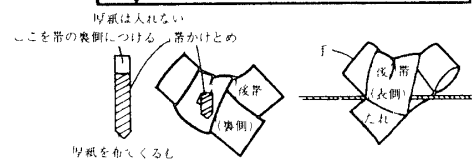
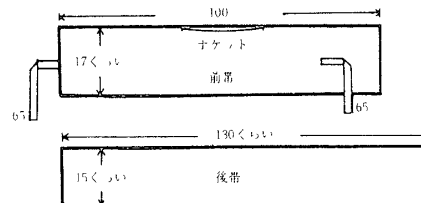
資料18 付け帯 (胸回りとおたいこ別のもの)



資料19 組み合わせ帯



資料20 組合せ帯 (おたいこ結び)



資料21 組合せ帯 (ヤの字結び)

図3 資料13~21の構成寸法 単位 (cm)

ける。さらに胴回りと同じ長さの紐をつけてある。資料20は「高校被服Ⅱ」日本女子大学家庭科研究会編、昭35年刊による“組合せ帯（おたいこ結び）”で、構成寸法は図のとおりである。前帯にはポケットと両端に紐がつけられている。お太鼓の長さ中央に帯上げ芯を入れた布をとじつけて、上端を下に折り返して手先を上へのせてお太鼓を形作り上げるというオリジナルな形式である。帯上げ芯を入れた布で胴体に巻いて着装し、その上に帯揚げをかけるのである。資料21は資料20と同じ「高校被服Ⅱ」による“組合せ帯（ヤの字結び）”で、前帯は同様で、後帯は15cm幅で130cmの長さのものをヤの字に結びつけ、厚紙を布でくるんだ帯かけどめを作ってとじつける。資料22は「被服Ⅰ」成田順也10名編、昭50年刊による“軽装帯（例1）”で、胴回りと同じ長さの前帯とお太鼓は上端に二組のスナップで襷をよせて、帯揚げ芯に安全ピンでとめつける形式である。資料23は資料22と同じ「被服Ⅰ」による“軽装帯（例2）”で、80cmと一巻き分の胴回りである。垂れ100cmの長さの上端をタックをよせて形作り60cmの手をつけて布でくるんだ厚紙にとじつける。資料24は「被服」矢部章彦・小川安朗他14名編、昭57年刊と「被服改訂新版」矢部章彦・小川安朗他15名編、昭63年刊の2冊による“軽装帯”で帯の構成寸法はないが、両端につけ紐がついた前帯と文庫結びの後帯の形式である。資料25は「被服」藤枝恵子他11名編、昭58年刊と「改訂被服」藤枝恵子他11名編、昭61年刊の2冊による“軽装帯（胴一重回し）”で、手と一続きの胴布の上下2段につけ紐がつけられている。80cmの長さのお太鼓は着装の時に形づける形式である。

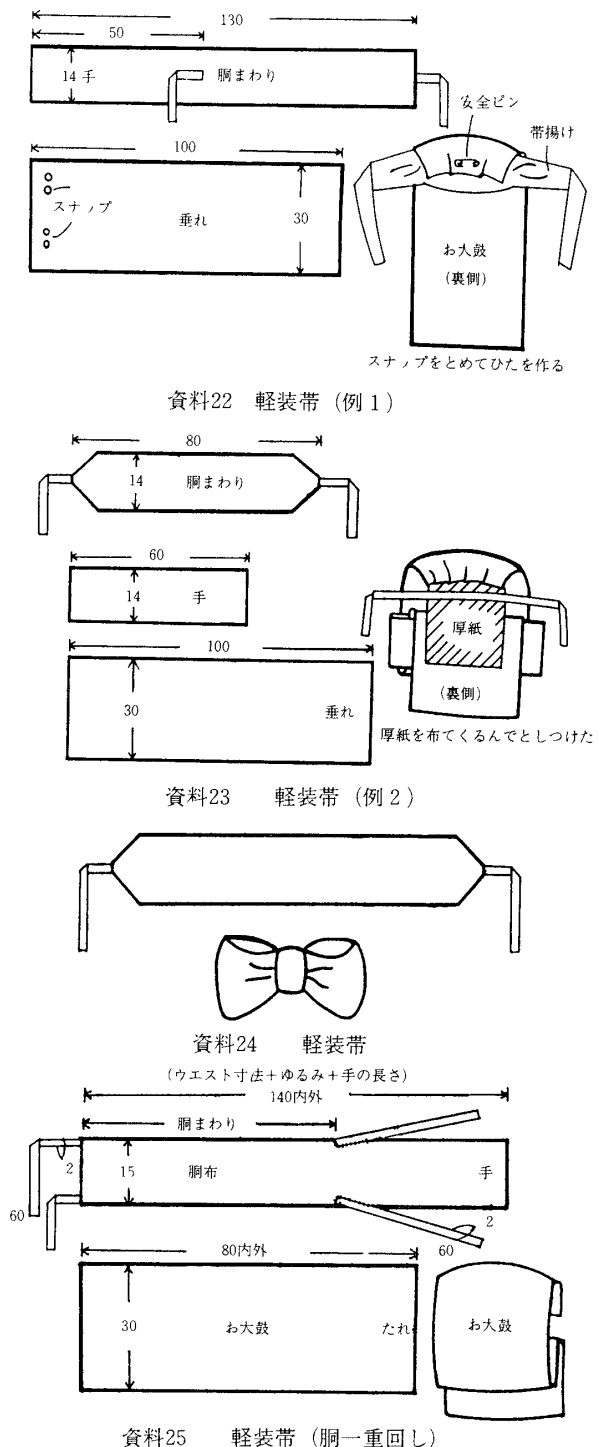


図4 資料22～25の構成寸法 単位 (cm)

要 約

明治初年～昭和期における学校教育における付け帯の状況を知るために、各種の学校で使用された被服の教科書における帯の種類と付け帯の構成について考察した結果、教材として構成される帯の種類は、戦前の高等小学校においては“腹合帯”が主流をなしており、昭和の初期からは“名古屋帯”も入ってきている。女学校、師範学校等においては“丸帯”，“腹合帯”，“男帯”が主流であり、大正の末からは“名古屋帯”が入り，“付け帯”は昭和7年頃から取り入れられている。戦後の中学校においては“半幅帯”が主体で，“名古屋帯”も一部みられた。高等学校においては“名古屋帯”と“付け帯”が主流をなしているが，“半幅帯”も少しみられた。

付け帯の構成については3種類がみられた。第1類は胴の部分とお太鼓やヤの字結びに作りつけた後帯に分かれた形式であり、付け帯の資料25点のうち17点と多かった。第2類は胴とお太鼓に結びつけた後帯が一本につながった形式であり、資料は7点であった。第3類は名古屋帯の形式に胴とお太鼓はつながり、つけ紐をつけた一重回り分の胴の長さで手軽にした形式の資料が1点みられた。また第1類、2類のいずれの形式においても、後帯の部分は帯揚芯、帯じめを取付けたり、厚紙やセルロイドの帯型というものを使用して、これにお太鼓の形を整えて、とじつける形式が多くみられた。

参 考 文 献

- 1) 豊田幸子, 神谷利賀: 名古屋女子大学紀要, **34**, 61～68 (1988)
- 2) 豊田幸子, 志賀たか子: 名古屋女子大学紀要, **35**, 41～49 (1989)
- 3) 鳥居美知子: 明治以降教科書総合目録Ⅱ中学校編, 267～270, 331～332, 446～447, I小学校編, 92～93, 172～220, 237, 小宮山書店 (1985)
- 4) 東京書籍株式会社附設教科書図書館東書文庫: 東書文庫所蔵教科用図書目録第1集, 458～460, 586～587, 第2集, 129～394, 559～619, 東京書籍 (1979)
- 5) 常見育男: 家庭科教育史増補版, 108～188, 433～462, 光生館 (1980)
- 6) 徳山正人他6名: 教科書図書館蔵書目録, 244～260, 432～440, 教科書研究センター (1985)
- 7) 財団法人渡辺学園: 明治以降裁縫教育史大要裁縫関係法令抄, 48～78, 日興舎印刷所 (1940)
- 8) 文部省: 学制百年史, 346～360, 帝国地方行政学会図書 (1980)
- 9) 玉木リツ: 裁縫教科書巻2, 98～114, 玉木女学校 (1932)
- 10) 大妻学校裁縫研究会: 新撰裁縫教科書巻3, 65～67, 三省堂 (1933)
- 11) 群馬県教育会: 新編裁縫教科書, 187～189, 煥乎堂 (1933)
- 12) 佐保会: 中等教育裁縫新教科書巻1, 224～227, 至誠堂 (1936)
- 13) 文部省: 高等小学裁縫新教授書第3学年用, 143～146, 大日本図書 (1937)
- 14) 岐阜県恵那高等実科女学校裁縫研究部: 裁縫の技折下巻, 122～126, 恵那高等実科女学校 (1938)
- 15) 岩国女子高等技芸学校: 新裁縫教科書中巻, 133～135, 岩国女子高等技芸学校出版部 (1939)
- 16) 岡本すみ: 精詳衣服新教本和服篇前篇, 21, 東京開成館 (1939)
- 17) 文部省: 中等被服2, 38～39, 文部省 (1944)
- 18) 堀越すみ: 被服I, 66, 中教出版 (1950)
- 19) 教育文化研究会: 被服, 80, 教育図書 (1950)
- 20) 職業教育協会: 新版生活の喜び家庭生活第3巻, 37, 開隆堂 (1954)
- 21) 奈良女子大学家政学研究会: 明るい家庭被服I, 72, 学芸出版 (1955)
- 22) 奈良女子大学家政学研究会: 明るい家庭被服II, 135, 学芸出版 (1955)

- 23) 成田順也 5名：被服Ⅱ，177～178，教育図書（1956）
- 24) 日本女子大学家庭科研究会：高校被服Ⅱ，60～64，実教出版（1960）
- 25) 成田順他10名：被服Ⅰ，211～213，教育図書（1975）
- 26) 矢部章彦，小川安朗他14名：被服，185，中教出版（1982）
- 27) 藤枝恵子他11名：被服，228～229，学習研究社（1983）
- 28) 藤枝恵子他11名：改訂被服，248～249，学習研究社（1986）
- 29) 矢部章彦，小川安朗他15名：被服改訂新版，185，中教出版（1988）